

阿部志郎先生講演会

10月28日秋の講演会「私の福祉観」

子どもたちに、こういう話をしました。

「友達が来て二人で夢中になって遊んでいると、3時になってお母さんがおやつのお心配をした。戸棚を開けて探しても、お菓子が無い。やっと缶の底にお煎餅を1枚だけ見つけた。

友達と二人いるのに、お煎餅たった1枚しかないんだよ。君たちどうする？困るねえ。でも簡単だ。お煎餅を手で二つに割るんだ。そして二人で分けて食べる。これを「半分こ」というんだ。半分こすればいいだろう？でもね、半分こすると、手で割ると、どうしても小さい方と大きい方になってしまう。さてどうするか？大抵、大きい方を自分で取るよねえ。先生はね、子どもの時、大きいのを取って、小さい方を妹にやったら嫌な顔をしました。君たちはそれをしては駄目。思い切って、大きい方を友達に上げなさい。友達喜ぶよ。友達が喜んでくれたら、君たちも嬉しいだろう？半分こしようね。」

こういう話をしたのです。そうやって子どもに教える私は…できないのですね。妻といつも、饅頭でもバナナでも半分こしました。無意識ですけども、私がいつも大きい方を取っているのです。でも、必ず大きい方を差し出す人がいます。どんな時でも大きい方をくれます。

インドに、こういう民話があります。馬が二頭いる。見たところ、同じ大きさ。見分けがつかない。一頭は母親。もう一頭は子ども。子どもと親をどうやって見分けるか？答えは簡単。二頭の馬の前に、餌を置きなさい。先に食べるのが子ども。親の馬は、決して先に食べない。これが母親。母親が赤ちゃんを抱いて、乳を含ませる。授乳。この授乳という言葉から、ニュートリオといいますが、この授乳という言葉から、保育士、栄養士、看護師、専門職に育ちました。福祉を専門にするものは、あの母親の慈愛をモデルにしなければならない、ということになるでしょう。

乙武洋匡くんっていますね。五体不満足。洋匡くんが生まれた時、両手両足が無いのです。母親が驚嘆するといけないといつて、しばらく母親に会わせなかった。やっとお母さんが赤ちゃんに会う時がきました。病院では、お母さんが卒倒したら困るといってベッドまで用意したのです。お母さんが来て洋匡くんを見た。「まあ～かわいい！」喜びの声を上げました。これが母親。この家族の愛。

なぜそれが家族の中で留まって、なかなか外に出られないのですかね。

なぜ家族の愛は、社会に出て行かないか。ベルリンだったかミュンヘンだったかの動物園の入口に、大きな字が掛かっていました。「犬は薬をくれた人を噛まない。それが犬と人間の違いである。」痛烈な言葉ですねえ。私はやっぱり自己愛、自己絶対化ですからどうしても大きな方を自分で欲しい。

そして同時に、社会的な壁があります。昔から伝えられた言葉に「売り物、後継ぎ、用心棒」とあります。売り物、後継ぎ、用心棒。売り物というのは、娘を指します。金が来

ると、娘が身売りに出る。昔は、家を救う美談でありました。この娘が嫁に出る。その時に、自分の家よりも少しでも格の高い家に娘を出したいのです。これを取り次ぐのが仲人。格の高い家に娘が行くと、自分の家の格が上がるのです。娘は自分の家を良くする売り物でありました。嫁に行くと、しなければならぬことが2つあります。一つは、家風に合わせる。自分の家の家風。漬物から味噌汁から、違うのです。で、これが姑によって、時にはいびられながら教わるという事になります。

もう一つは、子どもを産むことです。子どもが生まれませんと、「嫁して三年子なきは去る」。離縁になるのです。これを逃れる道は、妾からの庶子です。社会悪といいながら、妾を認めた理由がそこにあります。この子どもも、男の子が欲しいのです。私の友人で、もう60年前の話ですけれども、奥さんのお産で岩手県の実家に帰りました。別室でお産を待ちますと、お産婆さんがやってきて、深々と頭を下げて「残念でございました」と言いました。死産かと思ったそうですが、聞きましたら女の子なのです。昔のお産婆さんは、男の子が産まれると「おめでとうございませう」。女の子は「残念でございました」。ここにも残念組がいっぱいいますけれども。なぜ残念かという、女の子には相続権が無かったからです。家を継げない。そういう理由だったのです。

家というのは、実は私の先祖は青森県にありまして。墓があります。初めて墓に参りました時に、寺の住職が「あなたのお父さんはここへ入れませうよ」と言われて、私はショックを受けたのです。仏教の素養がありませんでした。父親は次男で分家しているのです。墓というのは、本家、すなわち長男夫婦が続いて入るのでして、次男以下は入れないのです。私は次男である父親の四男でして、関係がないのです。もう墓。なのに、時々行きました。血のなせる業といいましょうか。縦に、長男から長男へと繋がってまいりました。これが「後継ぎ」。これは長男を指します。

けれど昔は夭折（ようせつ）。子どもの時に死ぬリスクが非常に高いのです。私は大正の最後の生まれですけれども、私が産まれた頃、1000人赤ちゃんが産まれると160人死んでおります。明治天皇に兄弟が5人いました。5人とも5歳以下で亡くなっているのです。それを夭折というのです。その危険を感じまして、次男を予備役に取っておくのです。そこで次男の事を用心棒といったわけです。長男が死ぬと、すぐに次男が担う。長男が死にませんと、次男は「部屋住み」といって、結婚することができなかったのです。これを嫌って、次男以下は家を出ました。この人々によって、明治の産業革命が出来たのです。今でも田舎の役場へ行きますと、男性職員はほとんど長男です。長男は墓を守らなければなりませんので、家を出られない。そういう事情が隠されております。

こういう「家」という制度が続いておりました。住む家、私どもの家というのは、江戸時代の武家屋敷の名残でありまして、まず周りに塀を立てます。そして門があります。門を入ると玄関。玄関というのは、玄妙の関門にいるという、禅語から取った思想でありまして、関門というのは、人を見分ける場所です。身分の低い者は玄関に入れないのです。その家よりも身分の高い者が玄関に入れる。そうすると客は、一番か二番か三番か四番か

になりまして一番の方は客間に通される。そして上座に座ります。高級の武家屋敷では床の間の横に、武者隠しという空間がありました。家来が刀を持って来ているのです。どんな立派な客が来ても、決して心を許さない。客は、茶の間に入ることができません。茶の間というのは、血の繋がりのある者だけが入れたところでした。そして家の中では、家族がお互いに助け合う。

しかし一歩外に出ると、敷居を跨げば七人の敵です。人を見たら泥棒と思えと諭してまいりました。内と他所、よそ者の他所と、はっきりと区別をしまして、よそ者に対しては足を向ける。こういう構造を作ってまいりました。こうして日本の家族制度が続いてまいりましたけれども、だんだんと変わらして、家族崩壊といわれております。

確かに壊れてきました。昔は一家族 5 人でした。今は 2 人です。昔は、結婚をしないという人は大体 4% ぐらい。ヨーロッパでは 10% ぐらいいたのです。これは、修道院に入る人とか、あるいは専門職の人がいましたけれども、日本は 4% ぐらいが結婚しなかった。今はどうですか。女性 14%、男性 22% が結婚しないのです。だから子どもが出来ない。少子化です。

私の住んでおります横須賀の街ですけれども、小学校は、私がまいりました 60 年前には、全校生徒 1500 人おりました。今年 162 人しかいないのです。子どもがいないのです。代わりに年寄りが増えました。私が子どもの時、100 人の内 37 人が子どもでありまして、私は尋常小学校というところですけども。一学級 70 名です。4 学級ありました。今は一学級平均 24, 5 名になっています。かつて 37 人の子どもに対して年寄りが 4 人でしたが、これが今、逆転をしまして、子どもが 12 人。年寄りが 27 人という、こういう数字になってまいりました。そして 100 歳を超える方が 40 年前に 153 名でしたのが、今年の 9 月には 6 万 7000 名という風に増えてまいりまして、まさに少子高齢化となってまいりまして、家族が大きく変わってまいりました。

では家族は崩壊したのか？ 1995 年 1 月 17 日の阪神淡路大震災、今井鎮雄さんに習ったのですけれども、神戸市で 55 名の孤児がいました。3 月 11 日の東日本大震災、孤児が 241 名であります。養護施設の乳児院でその子どもを受け入れるために待ったのですよ。しかし子どもが来ないのです。それは 9 割を超える子どもが親族に引き取られた。どこからともなく親族が現れて、子どもを引き取った。でもほとんどは高齢者、お爺様お婆様でありまして、その後どうなったか心配されるところであります。

東日本大震災で、津波に襲われて、取るものも取り敢えず、逃げました。逃げる時に何を持って出たのか、一番多いのが遺灰です。先祖、家族の遺灰。二番目が家族のアルバムでありまして、金庫ではないのです。今なお、私どもの社会には親族がしっかりと生き続けているという事は、覚えておかなければならないだろうと思います。

この孤児を巡りまして、養護施設、乳児院、その他に、4 万名の子どもたちがおりますけれども、里親制度と以前からあります。最近、国はぜひこれを増やしたいと、高い目標を掲げております。アメリカは 76% が里親に引き取られております。オーストラリアは 94%

が里親に引き取られております。日本は社会的養護とっておりますけども、ようやく今15%というところでありまして、これをどうするかということは大きな問題であります。私は施設の方々に是非、必要不可欠だと声を上げてほしいと思っております。

「隣」という字がありますね。隣という字は、村境と言う意味でして、村と村の境目を隣というのです。英語で Neighbor というのですね。Neighbor というのは近い農民という意味で、人です。日本語の「隣」に、人は全く入っていないのです。ところが英語では、「人」なのです。そこでやむを得ず、「隣」の下に「人」を付けまして、「隣人」とか「となりびと」という風に、今日いわれるようになりました。私どもの家族も構成は親から子、子から孫へと、縦に続くようになりました。今なおそうです。

ヨーロッパ社会では、家族の基本というのは夫と妻です。夫と妻というのは元々、他人です。この他人の延長線上に隣人がいるのです。だから近いのですね。隣人が。私どもの場合は縦ですから、隣はどうしても遠くなるという、こういう事情があります。

さて日本の社会を考えますと、明治4年に岩倉具視を団長に、伊藤博文、大久保利通、木戸孝允を副団長に、49名の大型調査使節団を送りました。この使節団が、2年間にわたって12ヶ国訪問をしまして、帰ってきてから日本の政策を立てた。最初アメリカに行きました。アメリカの議会を傍聴しました。すると議員たちが喧々諤々の議論を繰り返している。使節団が描いたイメージは、魚市場のせり。騒がしいあのせりを想ったのですね。

「日本では殿様の鶴の一声で決まるのに」と。民主主義を受け入れるのは困難でした。気に入ったのはプロシア、即ちドイツであります。ビスマルクの時代で整然たる上から下への政治体制が作られておりました。これを持って帰りました。そして帝国主義の国に変えました。帝国主義というのは、モットーは富国強兵、殖産興業でありまして、強い兵隊で国を守る。経済を盛んにして国全体を豊かにする。これが目標であります。徴兵制を敷きました。強い兵隊を確保する。強い兵隊を確保するために、戸籍を作ったのです。皇族、華族、華族は公侯伯子男とあります。士族、侍、平民、その他。縦の線を貫いた身分社会を作ったのであります。徴兵で強い兵隊を作る。弱い者は排除されました。

明治の時代に、ロシアからアレクセイ皇太子が国賓として日本にまいりました。この国賓が帝都、東京に入ります時に、東京で浮浪者駆りをした。240名の浮浪者を駆りこんで、強制的に隔離致しました。これが今でもありますけども、東京養育院という施設の生い立ちであります。恥ずかしい姿をお客さんに見せるわけにはいかないのです。恥なんです。明治38年に、東京の三宅坂というところに、昔も今も英国大使館があります。そこにある朝、大使が出てまいりますと、大使館の門の傍らに数名の病人が倒れておりました。大使がよく見ますと、昔でいうと「らい」、今の「ハンセン病」でありました。大使は政府に抗議を申し入れました。伝染する感染症を路上に放置しておくのか、外交上の問題であります。日本は慌てて「らい予防法」という法律を作りまして、そして療養所を建てました。最初に出来たのが、瀬戸内海の大島という島で、神戸YMCAのキャンプ場の余島から見えます。そこに隔離致しました。

警察官を派遣した。職員は退職警察官。その任務は、患者を逃亡させない。そういう理由であります。これに対してそれよりも 20 年早く、テストウィードというフランスの神父が旅の途中、静岡県御殿場で乞食をしていた、水車小屋に住んでいるハンセン病の女性を見つけたのです。そして数名のハンセン病の患者のために、一軒農家を借りて生活をさせました。そして司教に嘆願書を書いた。「いずれの日か、会えなくなる日を覚悟しております」。

その年の初めに、ハワイのモロカイ島でダミアンという神父が感染をしているのです。ダミアンが感染をしてハンセン病になった。ダミアンという神父は、モロカイという実に不便な島に布教に行きました。そしてハンセン病の患者を前に、「あなたたちは」と説教を致しました。ある日、自分の手を火にかざした。熱くないのです。感染したのだと、自分でもわかりました。この時から「あなた方は」といった説教の始まりが、「私たちは」に変わっています。そして、感染してそこで亡くなった。

ダミアンの母国、ベルギーで軍艦を差し向けて、ダミアンの遺骨を引き取りました。アントワープの港に船が帰った時に、港に只一人の人が立っておりまして。国王です。国民が、国王を立てているのです。名も知れない一人の神父が、ハンセン病のために命を捧げている。ベルギーでは英雄でございました。

私はこれが福祉の国だと思います。ヨーロッパで早くから、尊敬された職業が 3 つあります。医者、弁護士、牧師。共通点は、高学歴です。大学を出ないと、この職業には就けない。高学歴ですね。もうひとつは、この 3 つの職業は「弱さ」に関わります。それを国民が尊敬をするという、そういう福祉の文化を作ってまいりました。

この神父と、日本のハンセン病が始まった政策との間には大きな違いが生まれております。知恵おくれの子どもを、戦前は白痴、痴愚、愚鈍、と区別を致しました。「痴」は痴呆の痴。知恵おくれの子どもは鈍くて愚か。こう決めつけたのです。これはヨーロッパも同じでございました。Idiot といひまして、追放されるという意味です。障がい者は追放する。ヨーロッパも同じでした。ただ、その後の歴史が大きく変わってまいりました。

第一次世界大戦で、米国の軍隊の中にたくさん負傷兵が生まれました。この負傷兵のためにリハビリテーションというのが始まったのです。負傷兵の損傷した機能を回復させる。そして社会に帰って自立をさせるというのが目標でございます。リハビリテーションの“ハビテーション”のハビタスというのは、「機能」というよりは、実は「人間性」を指しています。人生の回復をさせる。これがリハビリテーションであります。マッチのタバコを吸うのに、擦れない。その負傷兵のために、ライターがこの時できたのです。

リハビリテーションで生産社会を戻すという目標を掲げた米国に対し、私どもはどうかというと、私どもの場合は「廃兵」と負傷した兵隊を呼んだのです。廃兵とは捨てるという意味です。軍人の戦闘能力を失うと、捨てられたのです。こういう違いが出来てまいりました。

戦後私どもは、精神薄弱と、この子どもたちをいひました。誰があなたの精神は弱いと

決めつけることができるのか。英語では **Vulnerable** といいますけども、脆弱という意味です。脆弱というのは、風邪を引いて 3 日休むというようなことです。風邪を引くということと、障がいがあるということ、同じレベルで捉えるようになってまいりました。こういう違いを生むのには、背景が当然あります。世界戦争の折、日本の国が掲げた標語は「一億玉砕」、「国体護持」でありました。アメリカと 1 億人戦って死ねと。国体さえ残せばいい。天皇制です。

私は自分で志願して軍隊に行っております。そこで受けた士官教育というのは、「葉書 1 枚で、兵隊は何人でも集められる。お金は要らない。馬は、金を出さなければ買えない。軍馬を大事にしろ。」こういう教育でありまして、人間は消耗品でありました。

日本と同じく、空襲のもとに置かれた英国で、社会保障を発想したのです。国民の命と生活を守る社会保障を、戦争中に立案したのです。これを作ったのがベヴァリッジという人でありまして、ベヴァリッジ法案と呼ばれております。これを実施したのがアトリー内閣であります。ウィリアム・ベヴァリッジ、クレメント・アトリーという人は、二人ともロンドンのスラムのボランティア団体の出身です。

さっき言いました、岩倉ミッションが、このスラムに行っているのです。そこで書き残したのは、「悪魔の巣窟なり。救貧はほどほどにすべし」その一言です。帰ってきてから、恤救規則という最初の福祉の法律を作りました。近隣仲良く助け合い、国の責任は一切認めませんでした。社会的責任がない。これを改正したのは、昭和 4 年の救護法という法律でありまして、近代法制といわれております。法律は作ったのですが、政府に金が無かった。この時に立ち上がったのが、今の民生委員でありまして、全国大会を何回か開いて直訴する、と言う。「直訴」というのは、天皇陛下に訴えるという意味です。そこで政府は慌てて、救護法実施に入りました。昭和 7 年であります。近代法制といわれますけれども、救護法の対象になる、今でいうと生活保護ですね。私どもは、人間の権利として生活保護を今受けます。ただし救護法では、金銭給付を受けますと、公民権停止なのです。権利ではなくて、権利を剥奪されるという、そういう時代でありました。

この悪魔の巣窟といわれるスラムに、70 年前、今のエリザベス女王が戴冠をした。その翌日に、エリザベスはどこに行ったか。スラムに行っているのです。「社会で一番苦しんでいる人と私の喜びを共にしたい」。

森恭三という、当時有名なジャーナリストが東京に打電しました。日本のメディアは一切取り上げません。ニュースバリューがないのです。しかしこういう背景から社会福祉ができてまいりました。そしてこれを福祉国家と呼んだのであります。

北欧のデンマーク。日本が米軍の占領下に置かれたように、デンマークもドイツに敗れまして、ドイツ軍の占領下に置かれました。東ドイツは、ユダヤ人を 600 万人虐殺したといわれておりますけれども、占領軍も同じ命令を受けたに違いないのです。何月何日の何時から、デンマークに在住するユダヤ人は胸に赤いマークをつけて外出をしなければいけない。マークを付けずに出る者は即刻逮捕すると、命令であります。その命令が実施に

移される日の朝早く、デンマークの王様が一人で馬に乗って町を散歩致しました。コペンハーゲンの市民が馬上の王様を見上げると、なんと王様の胸に赤い恥の印がついているのです。それを見た市民たちが、自分たちで進んで赤いマークを付け始めました。さすがのドイツ占領軍もこれには手が出せません。ユダヤ人が保護されたのは、ドイツ占領下ではデンマークただ一国のみであります。

この故事に倣って、子どもの健康に関する国際会議が開かれました時に、私が付けておりますリボンができたのです。これをレッドリボン、デンマークの出来事を表したのであります。連帯の印であります。今皆さんがつけていらっしゃるのは、オレンジリボン、これは虐待防止のものでありまして、元はここから出ております。連帯の上に社会保障が出来上がって、福祉国家が成立をした。それを私どもが誤解をしました。戦後、ベヴェリッジから倣って、日本は社会保障を作ったのです。実に立派な社会保障制度です。

でも私どもの議会の考え方は、国家が福祉に全責任を持つという「福祉国家」です。行政の責任であります。全部行政でやれ、と。こういう風に解釈をしたのです。家のごみが落ちている。自分で掃除しないで、役場に電話したのです。「ごみを拾え。」役場から飛んできて、下水の処理をしてくれました。そして全国の多くの市町村に、「すぐやる課」といって、やって来たのです。市民が文句を言うと、すぐやる。市民の我々は見ているだけ。こういう姿勢をいつの間にか作ってしまいました。

共同募金が始まった時に、反対運動があったのです。理由は、行政責任を民間に転嫁するなという反対の理由でありまして、そういう時代を私どもは経験を致しました。すなわち、社会保障というものを骨組み、仕組みとして、制度として理解をした。それをどう使いこなすか、誰が支えるかという事をあまり考えなかったのです。

現在はどうか。国民年金、37%が未納、滞納なのです。権利は主張する。しかし負担の義務を負わない。NHKのテレビ、10人に2人は金を払わずに今見ているのです。こういう状況に今日なお、置かれております。

さて、こういうヨーロッパのような社会、早くいえば、市民社会だったのです。市民社会というのは、いろいろ解釈ができます。

私、初めて戦後、アメリカに行きました時に驚きましたのは、テレビ、電気洗濯機、乾燥機、冷凍庫、男性ですとシェーバーとかですね、食べ物でいうと、インスタントコーヒーとか、コーラ、これらが全部戦争中に作られて、普及をしているのです。テレビは全部もう、各家庭にありました。

私どもの場合は、戦争中、鍋から釜に至るまで、回収させられたのです。弾丸を作るためです。生活用具を取られた。アメリカは生活用具を新しく充実させたという違いに、大変驚いたことがあります。

私の妻は認知症で、晩年、車椅子でございました。どこへでも私は連れて行きました。アメリカに娘家族がおりまして、そこに行きました。そして一緒にフロリダのオーランドにある、新しいディズニーランドに遊びに行ったのです。中へ入りましたら、どの催し物

も行列です。ああ、後ろに並ばなければいけないと思いましたが、係員が呼んでくれるのですね。こっち来なさい。行きますと、別の入口から黙って家族一緒に入れてくれるのです。どの催し物に行っても最優先なのですね。そこに立って並んで待っている人々が、文句を言うどころか、笑顔で私どもを見送ってくれるのです。

もっと感心しましたのは、ビルで車椅子を押して、エレベーターのボタンを押しました。来ましたが、人がいっぱい乗っているのです。もう一度待たなければと思いましたが、エレベーターに乗っている人々が降りてきて、私ども夫婦を入れてくれました。これには頭が下がりました。生活文化を作っているのです。この生活文化を生み出すのが、市民社会であります。

こうした市民社会を、私どもはどうすれば作ることができるのかという、大きな課題を抱えているとっていいのかと思います。市民社会を作るといっても、そう簡単なことではないだろうと思いますが、市民社会の違いを感じますのは、今から 63 年前に、マリアンヌちゃん事件というのが起こったのです。父親がスウェーデン人、母親がアメリカ人、マリアンヌという女の子と 3 人で、日本に在住しておりました。不幸にして、両親が亡くなったのです。マリアンヌがただ一人、残されました。日本が制度によって、この子は養護施設で引き取ることとなります。これに対して、スウェーデンから、マリアンヌを引き取りたいという申し出がありました。

まだスウェーデンと日本の間に協定がありませんので、揉めまして、裁判になりました。そこに出席をしたスウェーデンの総領事が、「スウェーデンには、1 人の孤児に対して、養育を希望するボランティアが 100 名います」。私がショックを受けましたのは 私どもでいいますと、100 人の孤児に 1 人のボランティアがいるかいないか、という時代だったからです。しかしスウェーデンには 100 人、子どもを引き取りたいという人がいると。

昔は、ボランティアというと、周りからでしゃばり、おせっかいと陰口を叩かれたものです。だからボランティアへ行くのに、自分の街では分からないように、よその施設にまで出かけたのです。それがどうですか。阪神淡路大震災。140 万のボランティアが全国から澎湃として集まったのです。ボランティア元年と名付けました。東日本では、160 万を超えております。大きく変わってまいりました。

けれど、調査によりますと、「ボランティアに関心がある」、「してみたい」と、60%の人が答えているのです。しかし、実際にボランティア活動をしている人は 10 人に 1 人しかいません。それは、頼まれれば、誘われれば、求められれば、義理があれば出ます。待ちの姿勢です。極めて消極的です。声を掛ければ…ボランティアするのです。この人々を、どうやって掘り起こすか、実践にどう結び付けるかというのが、私どもにとっての宿題でもあります。

三和銀行に、川勝堅二という頭取がおられました。この人がロンドン支店長をしている時、財界人が集まってパーティをやるのです。これに夫婦で行く。すると奥さんは奥さんで輪ができる。話が段々、ボランティア活動になる。川勝夫人が、「ボランティアをしてな

いで恥ずかしい」と言った。そして川勝夫人が間もなくボランティア活動に加わった。ご主人の堅二さんが「それはいいですよ。でも私まで巻き込まれましたよ」と笑っていました。ボランティアをしないのが恥ずかしいと言わしめる社会を作っているのです。これが市民社会と言えるのだと思います。

市民社会というのは、中間層が厚いのです。中間層です。日本で認証を受けたNPOはようやく今 5 万件。アメリカは 144 万件です。層が厚い。その中心は教会でもあります。こうした社会を私どもはこれからどうやって築いていくのか。社会福祉法で申しますと、社会福祉基礎構造改革というのがございまして、社会福祉法という、新しい法律に変えました。このアジェンダは 7 項目ありまして、権利の問題とか、地域福祉とかあるいは「措置から契約へ」というような言葉を謳いまして、最後に「新しい福祉の文化の形成」という項目があります。もちろん、法律には入っておりません。世間でいわれているのは、福祉文化、福祉そのものが文化だというのが大変強い主張ですけれども、ここでは福祉を基盤にした文化を作ろうという、こういう考え方を打ち出したのであります。

その背後にありますのは、アジアで初めてノーベル賞をもらいました、インドのタゴールという詩人です。タゴールが日本にまいりまして、「日本はヨーロッパ化された。しかし、近代化されていない」と指摘したのです。当時の知識人たちが憤慨しました。ヨーロッパ化した。しかし近代化されていない。近代化というのはどういう事なのかということ、今日に至る、大きな問題であろうかと思えます。私どもは、文明を発展させる。産業工業社会を目指してまいりまして、それを文明という風に考えてまいりました。

シュヴァイツァーという、かつては高校生の理想像のトップにいた人ですけれども、その思想家が申しました。「人間の文化は進歩しているか。戦争によって、文化が衰弱した」という。私もそう考えておりました。東京が焼野原。神田の真ん中に、岩波書店が 1 軒建っておりました。岩波書店が戦後、岩波文庫を月に一冊だけ出版をしたのです。これが欲しくて、岩波を二重三重に当時の若者、学生が取り巻きました。活字に飢えておりました。戦争で文化が沈んだからです。そう考えておりました。

ところがシュヴァイツァーは、それは違う。「文化が衰弱したから戦争を起こした」と言います。驚愕致しました。戦後私が戦争から帰ってきて、立ち直る契機になった言葉でもあります。文明を包み込む文化を作っていかなければならないという思いにさせられたのであります。それにも関わらず、私どもが今日持っております価値観はどうでしょうか。私がおります神奈川県では、今から 40 年前に、鎮守の森が 2840 あったのです。今では、基準に達する鎮守の森が 45 しか見つからないのです。鎮守の森というのは、産業社会からいいますと無駄な空間です。無駄ですから、それを壊して、工場にし、住宅を建て、収容所に変えたのです。実に効率が良くなりました。生産が上がりました。私どもが、今の持っている価値観というのは、富、力、生産、効率、利便性です。確かに便利になりました。

戦前、東京から大阪にまいりますのに、特急つばめで 8 時間です。今朝、私は羽田から大阪まで 1 時間でしょ。実に便利になりましたね。手間を抜くのです。人間の手間を抜い

て、機械にやらせる。これが今の社会。効率がいいですね。ところが、福祉というのは手間をかけるのです。矛盾です。今日の社会、手間を抜く社会の中で、手間を掛けなければならない。なぜ手間を掛けるか？この意義を私どもは明確にする必要があると思います。

福祉。Care。Care の原語は価値、愛という事です。なぜケアをするかといえば、答えは一つしかないのです。愛するから。ここに、まず私どもの人間理解の確立が必要になってまいります。WHO、世界保健機構。健康の定義を、早くからしております。身体的、精神的、社会的に健やかな状態。単に疾病がないということではない、健やかな状態を健康という定義を広めました。

この WHO がこの定義に、「スピリチュアル」という言葉を入れようという提案を各国政府に出しました。日本政府もこれを受けました。日本政府は困惑したのです。スピリチュアルという概念が日本にないのです。概念が。「精神的」と訳しますと、実はメンタルという言葉、既に精神的と日本は訳していました。ではスピリチュアルとはなにか。ある説では、「霊」だ。霊というと、幽霊の霊なのです。魂というと、日本魂になるのです。そこで日本政府は、スピリチュアルを、未だにそのまま使っております。理解を超えているのです。このスピリットを早くから打ち出したのが YMCA です。Spirit, Mind, Body, YMCA は先駆者です。

スピリットというのは私の解釈によれば、神様が人間を作って、鼻から息を吹き込んだ。そして生けるものにされたと聖書にあります。私はそれがスピリットだという風に、理解をしております。精神障がいのため、現在、約32万の方が精神病院で暮らしております。3分の2以上が1年以上入院をしたままであります。ところがヨーロッパ、アメリカに精神病院というのは、今日ほとんどないのです。そして地域に帰した。精神病患者を、地域でしっかりと受け止めているのです。日本は、この地域がありませんから帰れないのです。偏見差別に晒される。精神障がい、それは心の病です。心が病んでいる。けれど、魂は美しいのです。それが Spirit でありまして、私どもはそういう人間理解に立たなければならぬのではないかと思います。

文明の事を Civilization といいますね。Civilization の civitas というのは元々、人と人とをいうのです。物ではないのです。人。一人ひとりが魂を持っている。息を吹き込まれたという事は、いのちです。神様の形を一人ひとりが持っているのですよ。内に。だからパーソナリティ。

戦後、「人権」という用語が登場しました。人間の権利。権利というと、自分の権利と同時に他人の権利があるわけでした、しばしば衝突を致します。パーソナリティというのは人格の尊厳という意味です。人権というのは、それは人間の権利というよりは人格の尊厳を指す言葉でありまして、その尊厳を持っている人間と人間とが出会うのです。出会いがあります。福祉というのは出会いの場です。異なった人が出会うのです。内と外の違いを越えて出会って、お互いに煎餅を分かち合うのです。それが福祉であります。

出会いとは何か。アメリカの視覚障がい、目の見えない子どもの施設にまいりました。

入りました玄関の正面の壁に大きな写真が掛けてあります。二人の子どもの写真。一人の子がもう一人の子の肩を抱いて、耳元で何か囁いているんです。聞いている子がにこーっと笑って、可愛らしい二人の子どもの写真でした。一人が白人の子、もう一人が黒人の子なのです。何の変哲もない二人の子どもの写真でありました。その下に、一行字が書いてあった。近づいて見ましたら、**The blind are also color blind**、と書いてありました。

目の見えない子は **Color**、赤とか黄色とかいう区別がつかないのです。先天盲の場合には分かりません。色が、**Color** が分からない。当たり前のことが書いてあるのです。目の見えない子は **Color** を区別できない。

ハッとしましたのは、**Color** という単語、アメリカでは特殊な意味を持っていて、**Color** というと、人間の皮膚の色を指すのです。白いか黄色いか黒いか、黒い子を、「**Colored**」色のついた人間と差別をしてまいりました。そうするとその写真は白人と黒人の子、お互い目が見えない。**Color** を越えて二人でにっこり笑ってられるという意味だと、理解を致しました。

私は目が見えます。見えると相手が気になるのです。時に、一歩も前に進めなくなりません。私の持つ、人種的偏見です。しかし、目の見えない子は白黒に関わりがない。目が見えない人は目が見えない、しかし、心は明るいのですね。出会いというのは私のように、目が見えても心の閉ざされている者と、目は見えなくても心の開いている者がお互いに出会って、互いの魂を開きあう、それが出会いという事ではないでしょうか。こういう出会いを私どもは果たして経験をしていくかということ問われるのでありまして、この人間関係の積み重ねによって新しい社会が生まれるに違いないと思います。

福祉というのは、常識的には数量で表します。入所者何名、何名退所した、定員オーバー、あるいは定員が不足しているとか、予算はいくら、決算はどうなる。数字で表すと大変分かりやすいのですね。合理的です。でも福祉の仕事というのは非合理です。私どもを超えて働く力がそこにあるわけでありまして、私は福祉というのは、その問題の背後に見えざるニードを見出すという、私どもが目を持たなければならないと思っております。

見えないのがまさに見えなくなる。現代社会。見えないものには目を向けない。見えるものだけを信頼するという、こういう社会でございます。私どもはそれに対してやはり、大きな目を開かなければならないと思います。

一つはアイデンティティですね。俳優の三國連太郎。30歳の時に副役が回ってきたのです。老人の役が。彼は歯を全部抜きました。30歳の時から義歯です。三國のアイデンティティです。推理作家の横溝正史。夜、書斎で小説を書いていた。背中がぞくぞくして来て、いても立ってもいられない。階段を下りて、家族のいる茶の間に行くと、自分で書いているのです。小説の主人公と自分自身が同一化しているのですね。このアイデンティティを、私どもはどうするか、という問題です。

ところが同時に、世阿弥が、「離見の見」と申しました。離れて見る、という意味です。能楽者が舞台上で舞う。その時に心は、観衆の側にある。自分を客観的に見ろという教で

あります。

勝海舟が言った言葉ですが、大局、大観。小事は小さくていいと。でも大きな社会をいつも見ろと。日露戦争で日本艦隊の味方艦の上で、東郷平八郎以下、敵艦を双眼鏡で見ました。その作戦を作った、名参謀と言われる秋山真之は、一人だけ双眼鏡を持っていないのです。部下が聞きました。確かに双眼鏡は良く見える。しかし、わしは大局を見る。福祉という仕事は、小局の仕事です。でも目はやはり大局を見ていなければならないと思いますね。

俳句に「月指」ということがあります。月を指す。「ああ～中秋の名月、綺麗だね～。」「ああ、本当に美しいですね。」これが月指です。親鸞が、「汝何ぞ指を看て月を視ざるや」と申しました。私どもは、月を指しているこの指に捉われるのです。隣の施設はどうしているのか。法律がどう変わるのか。収入は赤字にならないか、こだわりがありますよね。私どもは。指に捉われている。でも必要なのは、指の先を見る事なのです。

月。お月様で、うさぎが踊っています。踊っているのが雌のうさぎ。そこで地上で、雄のうさぎが踊る。子どもの時に習いました。今でも月を見ると、私はうさぎさんと思うのですよ。ロマンです。夢です。それが、ビジョンを生むのです。福祉にとって必要なのはビジョンですね。何を遠い目的に掲げるか。

この5月にハーバード大学で卒業式がありました。そこに招かれた講演者。Facebookの創業者、ザッカーバーグという人です。ザッカーバーグはハーバードを中退しているのです。卒業してないのです。それにも関わらず講演者として招いたという、ハーバードはやっぱ寛容ですね。ザッカーバーグがこういう話を学生にしているのです。NASA、米国の航空宇宙局に行った。掃除をしているおじさんがいた。そのおじさんに、「あなたは何をしていますのですか？」と聞いた。そしたらその掃除のおじさんが、「人類を月に運ぶ手伝いをしています」。いたく感動したザッカーバーグ。「あなた方に必要なのはこれです」と卒業生に申しました。目的意識。それがあるかどうか、大きな違いだと思いますね。

目標を目指して、遠いものを仰ぎながら小局の仕事をしていくということが、私どもに必要なのかと思います。戦争中、奇妙なことに天気予報ってなかったのです。今のように、20号台風、明日神戸来るかもしれない。そういう情報一切なし。軍事機密といったのです。奇妙ですね。戦争が終わって初めて天気予報ができるようになりました。ところがレーダーがない。气象台も数が限られている。器具がない。一番困ったのは予報官です。予報官が、气象台の台長に、「明日の天気分かりません」。そしたら藤原咲平という台長が、分からなければ空を見ろ。一言言いました。それは、原点に帰れという事なのか、遠い所を展望しろという事なのか、解釈は様々でありましょうけども、分からなければ空を見ろ。

中国の言葉に意中有人（いちゅうひとあり）壺中有天（こちゅうてんあり）と申します。意中というのは意味の意。心という意味です。自分の心に自分しか住んでいない。

その心に人を宿らせなさい、それには壺中。壺中というのは壺です。私どもは壺の中で下を向きながら、右往左往して今働いているのですよ。この壺中から、天を見よ。綺麗な青空が見える。自分の現実の実践の中から、絶えず上を向きなさい。そして一足、一足と、歩み続けなさいとそういう意味かと思います。皆さん方のこれからの活動に期待をしております。

ひょうご子どもと家庭福祉財団・神戸YMCA共催

秋の講演会

「私の福祉観」

「言いかえるならば、今は合理主義の時代なのです。エビデンス・ベースドと言い、看護でも、福祉でも、実証主義なのです。事実に基づいてやれと、極めて合理的です。(中略)
しかし、福祉のニードは非合理なのです。」

著書—愛し愛されて—p.141より抜粋

講師は学生時代に井深八重に出会い、そのことを契機として社会福祉事業に導かれ60年。その集大成をいかに引き継ぐかをテーマに、そして聞く我々はどう受け取るか。過去・現在・未来を敷衍しながらともに考える機会としたいと考えます。

日時 2017年10月28日(土) 午後1時～3時

会場 公益財団法人神戸YMCA 2階 チャペル

講師 阿部志郎氏(横須賀基督教社会館会長)

会費 500円(資料代)

定員 100名 事前にご予約ください。定員になり次第締め切ります。

主催 ひょうご子どもと家庭福祉財団・神戸YMCA

(講師プロフィール)1926年東京生まれ。1949年東京商科大学(現一橋大学)卒業後、米国ユニオン神学大学に留学。明治学院大学助教授を経て、1957年社会福祉法人横須賀基督教社会館館長に就任。2007年同館会長。2003年から2007年神奈川県立保健福祉大学学長。日本ソーシャルワーカー協会会長、日本社会福祉学会会長、東京女子大学理事長を歴任。現在神奈川県立保健福祉大学名誉学長、横須賀基督教社会館会長。1939年に青山学院中学部にてYMCAと出会い、一橋大学学生YMCA、東京YMCA会員、横浜YMCAに移り長年にわたり会員、理事を務めるなど奉仕されている。著書多数。



お申し込み・お問い合わせ先:神戸YMCA本部事務局 担当、宗行(むねゆき)

TEL 078-241-7201

FAX 078-241-7479

※お電話での受付は平日の9:00～18:00です。